

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H 2 1 . 9 . 2 8)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

項 目	20年度			21年度		
	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	94	81	53	53	50	45
規 格	559	542	434	382	340	345
合計	653	623	487	435	390	390

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

【コメント】

- 1 Qの切断量(実績)は、前年比34.1%減の435千トン。
(参考:20年度3Q/▲3.3%、同4Q/▲24.8%、1Q/▲34.1%、
7~8月/▲38.3%)。
- 2 Q(想定)は、9月を8月並みの123千トンとみて、390千トン程度と想定。
(21年7月は、同38.4%減の143千トン、8月は、同36.6%減の127千トン)
- 3 Q(想定)は、前期比横ばいの390千トン程度と想定。

2. 業 況

厚板シヤ業界の状況を概観すると、建設及び建産機部門で切板需要の約8割を占めるが、この両輪が大型建築案件や橋梁など一部を除き、回復の兆しすら見えないまま、長期低迷が続いている。

切板需給も、在庫の削減が需要の落ち込みに追いつかず、マーケットの在庫過剰感は依然払しょくされていない。このため、全国各地のシヤからは、「惨憺たる状況」、「底が全く見えない」、「出口が見えないトンネルの中」等々、現状及び先行きを危惧する声が増しに強まっている。

当組合が実施している月次調査で、シヤの活動水準を示す「切断量」の推移をみると、20年度2Qが前年同期比+7%、その後は3Q/▲3%、4Q/▲25%、21年度1Q/▲34%、7~8月計/▲38%と、期を追って減少幅が拡大している。

こうした中、在庫量は増加の一途をたどり、3、4月には55万トンに達した(バブル崩壊後のピーク時である平成10年と同レベル)。

在庫率も、活動水準の低下とともに、適正レベル(150~200%)を瞬く間に超え、4月には295%という異常に高い水準まで上昇した。

当組合員各社は、この危機的事態を打開すべく、本年4月以降、メーカーへの母材申込

みを大幅に削減するなど、本格的な在庫調整に取り組んできた。この結果、月末在庫量は、5月以降漸減傾向をたどり、8月末にはピーク比13万トン減の42万トンまで圧縮された。

しかしながら、在庫率は、低下傾向にあるものの、8月末が239%と、依然高い水準にある。引き続き、在庫調整はシャアの最重要課題である。

シャア各社は、今後とも、調整に向け、需要に見合った母材の申し込みを続行することとしている。加えて、雇用問題、資金繰り問題、与信不安など深刻な経営不安を抱えており、この窮状をどう乗り越えるか、困難な状況が続く。

次に、需要動向を概観すると、

(1) 建産機部門は、昨年秋以降の急速な受注の落ち込みが尾を引き、大半の機種が60～70%の大幅減を余儀なくされている。こうした中、一部建産機メーカーにおいて在庫調整の進展が見られるなど、ひと頃に比べると若干好材料が出てきてはいるが、生産計画は低位のままであり、依然需要回復の兆しは見えない。

一方重電分野では、送電用、原発向けなどエネルギー関連機種が比較的順調に推移しているものの、円高環境や受注競争の激化等により、先行きは全く不透明の状況。

(2) 建設分野については、まず橋梁は、今は端境期にあるが、今後、上期前倒し発注により、鋼材加工発注が年明け以降回復するものと期待される。また首都圏の超高層建築案件は、今のところ大きな計画変更は見られず高水準をキープしている。ヒモ付き系建材シャアは、夏場～秋口の仕事量がやや少ないが、比較的安定した操業を持続しそうである。下期については、①海外ファブが手を出せない大型建築案件が続いていること、②鋼材価格や鉄骨価格の下落により、ゼネコンサイドに底値感が台頭していることから、下期後半より発注が本格化する見込みである。

しかし、大阪、東海、九州地区は大型案件が少なく低調に推移している。

(3) 一般店売り分野については、ショッピングセンター、マンション等の設備投資関連や中小建築案件の中止・延期等の影響により、中小ファブの手持ち工事は極端に少なく、低操業が続いている。このため各地区とも相変わらず荷動きが低調で、打つ手なしの状況である。

一方、母材供給面をみると、メーカーロールの状況は、鉄鋼メーカーが春頃から本格的減産体制に入り、厚板需給の立て直しを図っているが、需要の減退に歯止めがかからず、一向に引締まらない状況。納期も大幅に短縮化している。また一部メーカーの設備不調も伝えられるが、今のところ供給面への影響を懸念する声は少ない。

シャア各社は、需要減退の長期化、市況の下落といった環境の中で、更なる在庫の削減

を目指しているが、昨年来のメーカー値上げ分の在庫を未だ抱えながら、ユーザーの厳しい指値との乖離に苦悩している。

なお、シャア業界における主要課題を列記すると、以下の通りである。

- ①在庫削減
- ②雇用問題（助成金の申請、臨時休業、操業短縮等）
- ③資金繰り問題（信用保証制度の申請等）、与信管理
- ④コンプライアンス対応（独禁法、輸送条件、品質証明問題等）。

※品質証明問題については、昨年来取り組んできたが、その成果として、本年7月、「建築構造用鋼材の品質証明ガイドライン」（案）がまとまり、近々最終版が完成する予定。

- ⑤建築分野におけるコンクリートとの競合、及び内外ファブの競合問題

3. 足元の主要需要部門の動き

（1）橋梁・建築鉄骨の動向

（全 体）

橋梁・鉄骨とも夏場～秋口の仕事は薄く、稼働の回復は年明け以降とみられる。

各地区とも大手ファブは比較的安定操業を続けているが、中小ファブは量的枯渇感が顕著になり、深刻さを増している。

（橋 梁）

一昨年の談合事件の影響やメーカーロールのタイト化によって、ズレ込んでいた物件が、昨年11月以降のロール正常化により、本年4～6月までにすべて消化され、4月以降は本来の入札量並みとなり、加工量は低レベルで推移している。

21年度の入札量は、補正予算込みでも25～30万弱トンと、極めて低いレベルが予想されている。

しかし、政府指導による「当初予算の80%は上半期中に発注する」との方針もあり、8～9月に入札が集中する模様。ただし、鋼材発注は年明け以降の見方があるため、シャアの仕事に繋がるのは年明け以降になる可能性が大きい。従って、足元数カ月は低レベルが続き、年末から年度末にかけて鋼材発注が急激に増加する可能性がある。

北海道地区は発注が前年比3割増加しているが、地区によっては下期への不安が強く、あまり期待できないとの指摘もある。

（鉄 骨）

中小ファブの稼働は、設備投資や中小建築案件の中止により、山積みができておらず惨憺たる状況が続いている。関連の一般シャアの稼働は4～5割程度で、相変わらず低操業を余儀なくされている。

他方超高層ビル案件は、首都圏においては今のところ大きな計画変更も見られず、大手ファブ対象案件は比較的堅調である。

しかし、ゼネコンによる、①海外ファブ（タイ/MCS、中国/精工PD）起用の動きや、②鉄骨価格の揺さぶりにより、発注遅れや発注数量が減少しており、大手ファブの夏場～秋口の山積みが極めて苦しい状況にある。

一方で、下期以降は、①海外ファブが手を出せない高級鋼を使用する建築案件（JPタワー、丸の内再開発、パレスホテル等）が続いていることや、②鋼材価格（とくに電炉製品）・鉄骨価格が急激に下落し、ゼネコンに底値感が出始めていることから、下期後半から発注が本格化する見込み。

なお、大阪地区は、昨年度後半より建築案件の大半が延期もしくは中止となっており、本年度は壊滅に近い状態にあるが、来年度は大型案件が出てくる模様（アベノ近鉄、フェスティバルホール、大阪中央郵便局等）。

なお、東海、九州地区は案件が少なく低調に推移。

（2）建産機・重電・金属工作機械の動向

（全 体）

財政出動の効果や中国需要の回復等により、景気は底を打ったと言われているが、建産機需要およびシャーは、急激な落込みから未だ立ち直れない状態が続いている。

しかし、本年6月頃と比較すると、素材在庫の減少や需要家の在庫調整の進捗等がみられ、状況は好転しつつある。このように、わずかではあるが明るさが見え始めてきたが、扱う製品・機種によって、シャーごとの明るさにかなりの強弱が見られる。

（建設機械）

建設機械工業会の統計によると、建設機械全体の7月出荷は前年比65.6%減で10ヶ月連続の減少となっている。

油圧ショベルは、前年比△76.3%であり内外とも不振ではあるが、好調な中国需要の影響で9月～10月には概ね世界的な在庫調整にめどがつきそうである。

建設用クレーンはどうも年内の回復は見込み薄のようである。他機種より遅れて減産に突入したが、販売はさらに悪化しておりさらなる生産調整を強いられている。来年以降に実販レベルの生産に戻る事を期待したい。

大型ショベルやダンプに代表される鉱山機械関係は、昨年の高水準の生産から、一転大減産の真っ只中であるが、東南アジア向けに若干回復の気配が見られるのがせめてもの救いである。下期の改善に期待したい。

（金属加工・鍛圧機械）

金属加工機・鍛圧機械は、製造業全般での設備投資の中止や延期から販売は激減状態を継続している。シャーへの切板発注量は著減しており、素材在庫も一向に減少せず経営面での重荷となっている。

関連指標である工作機械の受注動向（同工業会調査）では、本年1月以降緩やかな回復

基調を示しているが、非常に低いレベルにとどまっている。

なお、東海地区では、自動車生産が6～7割レベルまで回復しても、工作機械や金型等に波及せず、シャーには全く仕事が回ってこない状況である。

(重 電)

重電分野は、シャーによって若干温度差はあるが、総じて昨年並みの仕事量を確保できているようである。しかしながら円高環境や受注競争の激化から、変圧器等の受注減、海外製鉄プラント案件の減少もあり、来年以降の加工量が懸念される。

原発関連は、年内の仕事量は確保できているが、その後は2013年まで空白期間と見られており、その間をどう埋めていくのか大きな課題である。

(参考) 厚中板成品の最終用途比率 (平成19年3月出荷分。厚板シャー工組調べ)

- ・ 建築用： 41%
- ・ 土木用 (橋梁等)： 11%
- ・ 産業機械用 (建機、金属工作機等)： 27%
- ・ 電気機械用 (重電等)： 15%
- ・ 輸送機用 (船舶、自動車、鉄道車両)： 6%

以 上

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫推移

(H21.9.28)

組合員の厚中板在庫推移(167社・6事業所／自社所有分)

(単位:千トン)

項目	20/9末	12月末	21/3末	6月末	9月末	12月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	446	497	551	500	380	340
前期比/量	0	51	54	▲51	▲120	▲40
前期比/%	100.0	111.4	110.9	90.7	76.0	89.5

【コメント】

■シヤ業者は、今年4月以降、メーカーへの母材申込量を、出荷の落ち込み以上に削減していることから、在庫量は、21年3月末の551千トン进行ピークに調整が進み、8月末時点で421千トンとなり、ピーク比13万トン圧縮された。

■しかし、在庫率は、4月295%、5月294%、6月268%、7月242%、8月239%と高止まったまま推移している。

■今後もメーカーへの申込み削減が続くとすると、9月末在庫は40万トン割れの380千トン程度に、12月末は340千トン近くまで減少するものと想定される。

(仮に、本年9月以降、月間平均出荷量が18万トン程度で推移した場合、9月末在庫率は、211%、12月末は189%と推計。)

これからも需要水準は低調のまま推移すると思われるので、在庫率の適正化に向け、引き続き、メーカー、シヤともに懸命なる在庫調整への取り組み努力が必要である。

以上